— 書　評 —

「カモシカ騒動記・天然記念物は害獣か」

伊東祐朔・著　築地書館　pp.210　定価1,200円

岸元良輔（大阪市立大学・理・生）

カモシカによるヒノキの食害問題が表面化し始めてから十数年を経た。昭和54年以来，保護捕獲を名目として岐阜県下で2000頭，その他の地域も含めて4000頭を越えるカモシカが射殺されている。文化庁・環境庁・林野庁の3庁合意により，カモシカは特別天然記念物から解除され，地域指定にされようとしている。さらに最近では，毛皮や肉の商品化まで認められようとしている。なぜ，このような異常かつ理解しがたい事態になったのだろうか？

私自身はカモシカの捕殺が始まった年から7年間，秋田県太平山でカモシカの社会構造を研究してきた。1年のうち3分の2は山小屋で過ごすという少し世間と隔絶した生活もあってか，この間ずっとカモシカ問題から目をそらしてきたというのが正直なところである。太平山の観察でカモシカの社会構造を明らかにしさえすれば，カモシカの保護管理に役立ち，カモシカ問題解決のために一役買うことができるだろうと考えていた。しかし，本書を読んで，その考えがいかにうかつであったか思い知らされた。カモシカ問題の経過をたどると，まるで最初から射殺，商品化へのレールがひかれていたかのように見える。カモシカがどのような生態をもっていようとまったく関係なく，様々な利害関係や思惑によってカモシカ問題は思いもかけない方向へ動いているようだ。

岐阜県下の高校教諭であり全国自然保護連合理事である著者は，カモシカ騒動が持ち上がって間もない昭和50年以来，10年間この問題に取り組んできた。本書は，その間の著者の体験および新聞記事の切抜きをもとに，岐阜県下を中心にカモシカ問題の顛末を克明に記してある。本書から拾い上げて，岐阜県下でのこの経過を簡単に整理してみよう。

昭和48年，食害騒動勃発。

昭和50年10月，文化庁の指示により県教育委員会の委託を受け，“カモシカ生態調査団（代表東滋氏）”が発足。11月に文化庁は小坂町にカモシカ5頭の捕獲（現状変更）を許可，調査団は許可の撤回を求めて抗議。

昭和51年3月，最初の捕獲作戦失敗，2週間後に1頭を捕獲するが運搬中に死亡。

昭和52年4月，小坂町で町ぐるみの密猟事件が発覚，その後不起訴になる。11月に県教育委員会は200頭の捕獲を申請，これに対して文化庁は75頭を許可，さらに翌年25頭を加えて100頭とし，威嚇用に銃の使用を認める。

昭和53年10月，ワナ法は捕獲の成果が上がらないので，文化庁および環境庁は麻酔銃の使用を認め，捕獲許可数を110頭とする。

昭和54年12月，文化庁は130頭の捕獲及び銃の使用を許可，翌年3月までに119頭を捕獲するがこのうち116頭は死亡。59年度までに2022頭が捕獲される。

昭和60年1月，県内の林業家430人で結成された“御岳・恵那山系日本カモシカ喰害損失請求原告団”により国を相手取って16億5900万円の損失補償を提訴。

全国自然保護連合の考え方を代表する著者の主張は，カモシカ食害騒動の背景を昭和30年ごろからの国有林大面積皆伐とそれに続く単一樹種の植林にあるとしている。蔭樹であるヒノキは直射日光に弱く，皆伐により乾燥した土地は決してヒノキの生育によいとはいえない。しかも，保水力の低下やずさんな林道敷設により斜面の崩壊や水害の原因ともなっている。“適地適木”の原則を忘れた森林施行では，カモシカの食害がなくても，ヒノキの生育に適さない土地に植林されたヒノキは当然育たない。このような無謀な森林施行が，国の指導のもとに民有林にも行われてきた。従って，カモシカ騒動の本当の主役はカモシカでありえないとしている。

もうひとつの主張は，たとえカモシカに頂芽を食われたとしても，ヒノキが生育できる土地であれば，その後順調に育っているということである。苗木が食害に遭い，翌年補植したものも食われて食害激甚地域とされたにもかかわらず，数年後には双方とも競合しあい，一方を切り倒さなければならないほど生育しているという。著者はこの事実を林野庁や岐阜県林政部に示したが，学位を持たないことを理由に聞き入れられていない。

食害が表面化し始めた当初は，なんとかしてほしいという林業家の切実な思いがあったに違いない。しかし，問題が大きくなるにつれて様々な思惑がからみ始めた。著者のふたつの主張とともに，カモシカ問題にからんで様々な立場の人の雑多な利害関係や思惑が存在することを読者に伝えることが本書のテーマのようだ。例えば，林野庁にとってカモシカ騒動の本当の狙いは，林野行政失敗の隠ぺいのためとしている。林業家にとっては補償金目当てもある。カモシカ憎しで射殺欲が先行していることもある。林野庁をはじめ林業家たちもヒノキ再生の事実を認めたがらず，しかもポリネット法などの効果的

な食害防除策を施そうとしないのは，このような様々な思惑がからんでいると著者はみる。

文化庁は捕獲者側にカモシカ１頭につき10万円近く，計約１億円を支払ってきている。今後捕獲費用を支払うかわりにカモシカの毛皮や肉を商品化するという。これは欧米の野生動物のマネージメントからの発想であろう。増えすぎた個体群を適正に戻すために間引きを行い，その毛皮や肉を資源として利用しようという合理的な考え方である。しかし，欧米ではこのようなマネージメントにすぐに対応できるだけの野生動物に関する膨大なデータが蓄積されている。これを忘れて表面的に合理主義をそのままカモシカに当てはめようとすることはナンセンスである。結局はカモシカの商品化問題も，ただ単にカモシカに経済的価値を持たせようとする人たちの思惑から出たものとしか考えようがない。自然保護団体の異議申し立てにより，商品化は見送りになったものの，三庁は (1)肉は自家消費，(2)毛皮は方針が決まるまで関係市町村で保管する，という暫定処置を行ったに過ぎない。しかも研究資料としての頭骨その他が研究者にまわらないという最悪の事態となっている。

数え上げればきりがないほどの思惑がからんでいる現状で，カモシカの捕獲にストップをかけることはかなり難しくなってきている。今後早急に行わなければならないことは，食害地域ではカモシカの生態調査ではなくて，過去に食害があったヒノキが順調に生育していることを示す科学的データをさらに詳細に継続して集めることと，カモシカ捕殺後の食害がどのように変化したか調査することであろう。まだ食害が問題になっていない地域でも，カモシカの生息状況その他をあらかじめおさえておく必要がある。例えば，近年秋田市では市街地にまでカモシカが出現し始めており，いずれなんらかの問題が出そうな気配がある。本来の生息場所では皆伐跡のブッシュがカモシカに豊富な餌を与え，生残率が高くなっていると思われる。しかし，カモシカはなわばりをもっているため，あぶれたカモシカが下へ分布を拡げ始めたらしい。すでに農作物への被害も出始めており，このまま放置すれば岐阜県と同じような問題に発展しかねない。林野庁・林業家側では，皆伐方式の見直しと，林業施行の方法が生態系におさまるよう根本的に改革する必要性を考えてもらいたいが，無理な相談だろうか。

結果論になるが，カモシカの食害が表面化し始めた頃に，カモシカの生態などの食害問題にすぐ対応できるだけのデータがすでに揃っていたとしたら，余計な思惑が立ち入る余地はなかったであろう。カモシカだけでなく少なくとも今後問題が予想される動植物について，大学の研究室を通してあるいは新たに研究施設を設けるなどして，科学的基礎データを蓄積しておかなければならない。これにより様々な問題を早期に解決でき，結局は経済的にも安上がりになるだろう。

本書のテーマからそれるため最後になったが，第１章のカモシカの観察に関して，カモシカを研究している者の立場から一言批判をくわえたい。この章では秋田県太平山でのカモシカの生活が描かれているが，おそらく著者はもっとも印象に残った観察ばかりを取り上げているのだろう。そのためカモシカの一般的な生活について読者に誤解が生じるのではないかと思われる。(1)同一斜面のあちこちの伐根上に計14頭が寝そべっていたこと，(2)オトナ４頭が集団でいたこと，(3)母子のグループ２組が数メートルの間隔でいたことなどの観察から，著者はカモシカの単独性となわばりの存在に疑問を投じている。しかし，ほぼ同じ地域を調査地にしてきた私の観察では，ほとんどのオトナが同性間で明らかになわばりを持っていたし，４頭以上の群れは非常にまれであった。同一斜面の14頭も，それぞれを個体識別し長期間観察すれば，数頭ずつのグループがスペースアウトして生活していることがわかるだろう。オトナ４頭の群れについても，年齢判定と長期観察を行って個体間の社会関係を知りたいところである。私の観察でも母子２組の例がある。この場合，一方の母親は他方の母親の出産年齢にまで達した娘であり，まだ母娘間で厳密ななわばりができあがっていない。やはり本書の中では，カモシカは主として単独生活し，せいぜい２－３頭の小グループしか形成しないという一般的な姿を描いてもらいたかった。著者の上記の観察は貴重なものであり，それなりのテーマで取りまとめて別の機会に発表してもらいたい。

カモシカの生態を中心に扱った「ニホンカモシカの生活」（羽田健三・監修）が同書館からすでに出版されているが，カモシカ問題を主題にした一般書は本書が初めてであり，自然保護関係の人たちだけでなく，一般の人たちにも広く読んでもらいたい本である。生活がどんどん合理化しているなかで，自然は人間にとって欠くことができないものであり，カモシカ問題の現状から自然保護とはなにかをじっくり考える好機となろう。私は動物の保護管理よりも，人間管理の方がよっぽど難しいという読後感を持ったが，いかがだろうか？ 自然保護問題とは，多かれ少なかれ同じような問題を抱えているのだろう。